

まつもと 公民館報



シリーズ 受け継ぎ伝える松本のたから 42

松本市重要無形民俗文化財 今井下新田の八日念仏と足半あしなか

**足半あしなかにこめられた
人々の安らぎ**

2月10日(日)今井下新田で、八日念仏と足半が行われました。午前中に5つの足半を編み、「南無阿弥陀仏壹百万遍」の札をはさんでおきます。

午後から町会の総会を兼ねて、数珠を回しながら八日念仏の「南無阿弥陀仏」を唱え、大きな玉がくると、押んで回します。

念仏が終わると、町内の5カ所に足半を置きます。巨人がいることを疫病神に気づかせ、その侵入を防ぎ、安らぎを得ようとする伝承行事です。

未来へつなぐ 私たちのまちづくりの集い

第34回公民館研究会・平成30年度地域づくり市民活動研究会、2月17日に松本市中央公民館で開かれ、約380人が参加しました。地域づくり市民活動研究会との合同開催になって2年目の今回は、分科会のテーマを市民から募集して実施されました。

基調講演

最初に村上英己氏（全国公民館連合会・事務局次長）より公民館の現状について「現在、公民館が教育委員会以外でも運営ができるようになってきている。公民館と聞くと『閉鎖的』と感じる人が多く、利用者に偏りができてしまっている」と話題提供がありました。

続いて、牧野篤氏（東京大学大学院教育学研究科教授）による「未来へつなぐ 私たちにできること」と題した



講演が行われました。教育施設の一般行政への特例的移管が可能となり、その過程で「社会教育」とは何かが問われています。

人生100年、少子高齢人口減少の時代を迎え、問題視する見方があります。しかしながらこのことは、よい社会を作ってきた結果とも捉えられます。

居場所を作る

定年を迎えても多くの人は、まだまだ元気です。社会参画しながら次世代を育てていくことが大切ではないでしょうか。

両親が共働きで、居場所のない子どもたちは、簡単に社会の裏側に引きずり込まれてしまいます。みんなが繋がって、一人の子どもにも5〜6人の大人が、少しずつでもいいから関心を持っている社会が

作れないでしょうか。そのために必要なことが社会教育です。社会を永續させるための営みです。当事者性を持ち、したいこと、してほしいことをはっきり示さないと社会教育は簡単に捨てられてしまいます。

自分たちが主役に

住民自身が、地域社会をつくっていく、公民館は元々そのためにも造られた拠点です。互いの顔が見えるたくさん



小さなグループが重なり合うことで、互いを認め合える生活基盤が作られます。

最後に牧野氏は「お互いに関心を持ちながらつながれる社会を作っていくことが社会教育の基本であり、公民館の

役割ではないでしょうか」と話しました。

市民活動商店街

「未来へつなぐ 私たちのまちづくりの集い」の一環で、中央公民館2階にて市民活動が紹介されました。

松本市健康づくり推進員連合会では、公民館報に連載した「歩こう松本」に掲載された「ウォーキングマップ」を利用して、活動のPRをしていました。

安曇野市の市民団体「あづみのフィルムアーカイブ」は、思い出の映像をDVDで編集し直し、一緒に鑑賞することにより、世代間のコミュニケーションの円滑化に活用しよう

というものでした。公民館報の「まつもとの今昔」の写真の展示は、パネルの前で昔の様子を若い方に説明している姿も見受けられました。



ちよこつと 松本さんぽ

～大きな足半で疫病神を撃退～

2月8日に近い日曜日、今では見かけなくなった、かかとの部分がない草履、足半を皆で5つ編んで「南無阿弥陀仏壹百萬遍」の札をはさむ。八日念仏を行った後、足半は町内の5カ所に置かれ、巨人がいることを示して、集落へ疫病神が入ることを防ぐ。



(撮影:2019.2.10 今井下新田)

市民の思いに 応えた分科会

昨年度までの集会の積み重ねを踏まえ、市民の思いを入れた11の分科会が行われました。その一部を紹介します。

児童・生徒と地域との対話が円滑になれば

第1分科会「子どもたちの本音を知り、子ども目線を生かした地域活動を探ろう！」では、現役の児童・生徒がパネリストとして参加しました。その中で、学校、児童、生徒が抱える課題や要望の中の一つは、公民館が介入することによって解決する可能性があることが分かりました。

格で勢いのある松本山雅FCの「ホームタウン活動」という、地域密着型のチームづくりを紹介しました。地域との要請が一致した活動が可能になっていると考えられます。年代を問わずスタジアムで躍動する人々の姿に、地域づくりのヒントがあるかもしれません。

ここも注視して

第4分科会「子どもたちのほっとできるところって？学校？家庭？他にも…？」では、思春期以降の子どもたちも対象とする「フリースペース十色（といろ）」や、外国由来の子どもたちに日本語教育を通してさまざまなケアを目指す「ヤング日本語教室」など、見過ごしがちな領域からの活動実例を踏まえて意見交換が行われました。居場所づくりの重要性が認識されるようになった今日、きめ細かな活動が重要になるでしょう。

世代間の対話が円滑になれば

第10分科会「松本の歴史・文化を次世代に伝えていくために」では、青山様、ほんほん、三九郎の課題が取り上げられました。話題提供者となったPTAの方の発言の中に、「やらされ感」という言葉が何度か登場し、問題の切実さを訴えていました。一方で、年配者を中心に協力したいという方も少なからず存在していることが分かりました。世代間の対話が円滑になれば、新たな打開策が生まれるかもしれません。

まとめ

最後に滝澤澄夫実行委員長が「公民館は地域づくりに欠かせない機関であり、公民館の重要性を再認識した。実践した成果や課題を来年またこの会で検討できれば、今回の目的が達成できる」と会を閉めました。



第2分科会「楽しみながら仲間づくり&生きがいづくり」松本山雅を活かした地域づくりの取り組み」は、J1昇

写真でつづる まつもとの今昔④2 ～松本駅前～



(2008.9.7 写真提供：日本報道写真連盟)
駅舎等の建物は変わらないが、時計塔や広告が大きく様変わりして、駅前広場も緑が多くみられる。



(2019.2.19 撮影)
駅前広場のスペースが広々として、配置もすっきりして、合理的な流れができている。

おこひる

「平成最後の…」そんな言葉を良く聞くようになった。私たちの生活の中に既に馴染んでいる元号。平成の幕開けをリアルに体験した昭和生まれの私としては、次の元号が何になるかはとても興味のある話題である▼気になったので元号について調べてみると、飛鳥時代の「大化」に始まり「平成」まで247の元号が。長い歴史の中で多くの元号が生まれているが、その多くは聞いたこともない馴染みのないものがほとんど。それもそのはずで、数年単位で元号が変わっていったのである▼昭和のようには64年という時間があれば、多くのことがなされ、歴史の1ページとして記憶されていくのだが、元号は無くても良いのではとの声もあるが、1300年継承されてきた元号、これからも永遠に継続してほしいと私は思う▼今年の5月1日から新元号となるのだが、次の日が誕生日の私にとつては何か縁を感じる。来年にはオリンピック・パラリンピックなど大きな行事が待っているし、新しくなれば何かが変わるといったわくわく感もあり、明るい未来を新元号と私に期待したくなる。50歳という区切りに、思い出深い誕生日となるに違いない。

歴史探訪
探ろう松本 10
自然の息吹が聞こえる心のふる里 梓川

地区の現状

蝶が羽を広げた姿の松本平、その中心部に位置する梓川地区は、西山山麓に端を発する扇状大地に発展した地域です。昭和30年4月に、梓村と倭村が合併し、梓川村が誕生しました。平成17年には松本市と合併し、人口1万2745人、世帯数4691世帯（平成31年1月1日現在）、28町会で構成されています。

歴史探訪

古来より農業を中心に、豊かな文化が開けた梓川。この地に点在する古刹の多くは、五穀豊穡や子孫繁栄など、地域の発展を願い建立され、その多くは、国重要文化財に指定されており、道行く人の心を引き付けます。梓川地区には、88体ほどの道祖神があります。貧しい暮らしの中で一番身近な信仰の対象として、厄落としと縁結びなどの願いをかけて祀ってきました。昔も今も変わらず、人々の暮らしを見守り、優しい微笑みを

投げかけています。歴史を語る数かずの文化財、道行く人の心にそっと寄り添い、暮らしの中に安らぎとぬくもりを感じます。



田園探訪

北アルプスの山並みを背に、梓川の清流に潤う野辺の花ばな。春には桜やリンゴの花が咲き乱れ、川辺にはこまち草（旧梓川村花）の紅色が瞳を楽しませ、色彩豊かな田園帯が訪れる人の歓声を誘います。清らかな水と肥沃な大地によってはぐくまれた味覚の数かず。評価の高い穀物

や野菜に果実。大自然の恵みを、ゆつくり楽しめます。梓川地区の西部（段丘上）は、リンゴを中心とした果実の大産地です。さまざまな花が咲き揃う風景はまさに桃源郷。夏から秋にかけて、良質な果実がたわわに実ります。

梓川遊々探訪

梓川地区には、梓川清流沿いに梓水苑を起点とするウォーキングコースがあります。5キロメートル、10キロメートル、20キロメートルの3コースがあり、体力に合わせた選ぶことができます。緑の中を走り、遊び・癒される。大自然の懐深さを感じる梓川の休日、都会にはない「梓川時間」を楽しんでみませんか。



わがまち自慢（新村地区）
元気に走ろう！

新村地区元日マラソン

寒さの中、地区内を走る元日マラソンも44回を数える行事となりました。今年も元日の8時30分ころ、新村農村広場に老若男女約40人が集まり、寒風について元氣よく走りました。

この行事は、昭和50年当時に町会対抗駅伝大会を実施していた新村地区で、県の駅伝大会など長距離走の愛好者有志が立ち上げた行事です。

そのためか、長距離を走ったこともありましたが、現在は小学生などに合わせ、約2キロメートルを走っています。



寒くたって、元氣よく！

地産地消のかんたんレシピ

ちょっと料亭風に
『カブのホタテあん』
 カブが一品料理に変身!!

材料：カブ、ホタテの水煮、塩、醤油、日本酒、片栗粉

1. カブを縦に1cmぐらいにスライスする
2. 鍋にカップ一杯の水と、ほぐしたホタテの水煮を汁ごと入れる
3. 塩・醤油・日本酒とカブを入れて煮る
4. カブを器に盛り、残った煮汁に水溶性片栗粉でとろみを付けて、カブにかける

